

近世の栗田遺跡

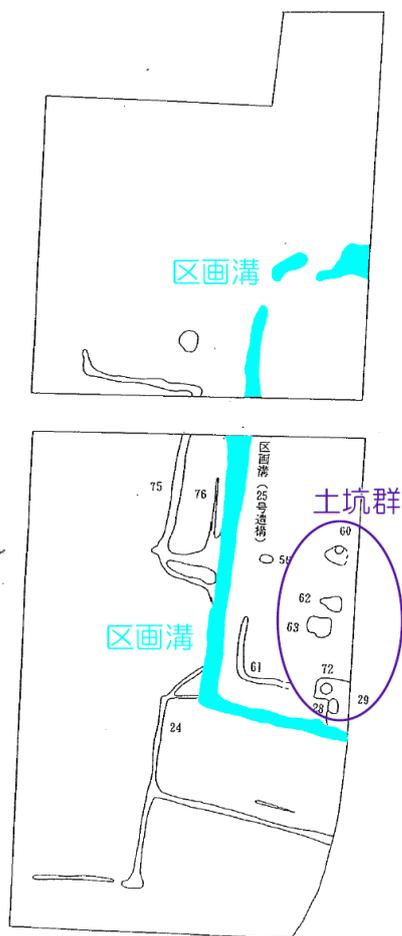
江戸時代、栗田地域には栗田村と新保村^{しんぼ}の2箇所の村がありました。村名の由来について、『石川県石川郡誌』では、新保村は現在の栗田の集落にあたり、栗田村は、現在の豊田日吉神社^{とよたひよし}から西方約100～200mにあったと記しています。また、両村の間には栗田川^こ（木呂川の地域的呼称）が流れ、その川がたびたび氾濫^{はんらん}することから、栗田村の人々は不安になり、両村が協議のうえ栗田村の人々は新保村に移住することとなった、と述べています。この記述と合うように、現在の集落は、1955年（昭和30）富奥村^{とみおく}が野々市町と合併するまでは、「栗田新保」と呼ばれていました。

ところで、栗田遺跡の東南で発掘調査したところ、江戸時代の集落の跡が見つかりました。集落は、幅約2mの溝で囲まれた中に営まれており、溝の内側には土坑^{どこう}と呼ばれる大きな穴が複数見つかかり、中から碗^{わん}・皿^{さら}・鉢^{はち}など大量の唐津焼^{からつやき}・伊万里焼^{いまりやき}などの国産陶磁器^{こくさんとうじき}が出土しました。

発見された集落は、18世紀前半まで存続したようで、記録に残る栗田村にあたると考えられます。



区画溝と土坑群



主要遺構図



出土した国産陶磁器類